

昭和二十八年七月二十三日 第三三〇号 郵便物認可  
昭和三十八年七月十五日 發行 (毎月一回・十五日發行)

(通第一七二号)

# 慈光

第十五卷 第七号

## 目次

南ベトナム仏教徒事件	花田正夫	(1)
『教行信証』信楽釈(三)	近角常観	(4)
聖徳太子	福島政雄	(12)
——日本的自覚への道標を讀みて——		
弥陀大悲の誓願	故・後藤祐護	(14)
『朝晩仏様を拝みましょう』	北条恵実	(18)
堂の鈴(十一)	佐藤強三郎	(20)

# 南ベトナム仏教徒事件

花田正夫

六月廿日の朝日夕刊に『老僧の自決』という記事がある。それを引文すれば、

南ベトナムのサイゴン市の目抜き通りに端座する七十二歳の老僧。他の僧二人が五ガロンのガソリンを老僧の法衣にふりかけ、老僧みずからマッチで火をつける。たちあがる黒煙と、法衣を包む赤い炎。その中に身じろぎもせず経文を唱える老僧。

周囲には七重、八重に僧がピケをはつて官憲の近づくのを防ぎ、あるいは消防車の間に身を横たえて車を動かさせまいとする。群衆は息をのんで、シワブキ一つしない。

これは去る十一日、白屋の街頭のできごとだった。……わが国でも三百八十一年前、甲州恵林寺の快川和尚が織田信長の怒りにふれて寺塔を焼かれ、燃えさかる炎の中に座し

「安禅はかならずしも山水をもちいず、心頭を滅却すれば火もまた涼し」といつて、信長の宗教迫害に死の抗議をしたことがあ

る。とはいえ廿世紀後半のいま、信教の自由を、みずから命を断つて守らなければならないとは……

この仏教騒動は、お釈迦さまの誕生祭に信徒の旗を揚げようとする仏教徒と、これを禁止しようとする政府側との対立から始つたものだが、その後には、全国民の一〇％にすぎないカトリック教徒が、国家権力に支えられ、軍官民の各界、各機関の要職を占めて、八〇％の仏教徒を圧迫していることに對する不満があり、結局現政権への批判であるだけに、事態は簡単におさまるまい。云々。

とある。日本で有力な宗教新聞の中外日報は、この事件を大々的に報じているが、そのなかで、

今まで南ベトナムの仏教徒は、ベトナム政権に反対の運動を起したことはなかつたが、現在「カトリックに非ざれば人に非ず」というような風潮があつて、必然、仏教徒の強い反感を買つてきた。例証をあげると

①現在の政府はカトリックのゴア大統領一家に支配されていて、カトリックでなければ政府や軍の要職につけない。

②政府は小数のカトリック教徒を優遇し、米国の援助もカトリック団体を通じて流出されている。

③カトリック的な立法が相次いで行われてきた。

## 事件の経過

〔中外紙〕

- 五、一 南越政府は釈迦誕生祭を一週間延期を命じた。
- 五、七 戦勝記念日と同日であるとの理由で再度禁止。
- 五、八 仏徒三千名が、仏旗の掲揚禁止、カトリック教徒との差別に抗議し、軍隊と衝突、死者七人負傷者十七人、逮捕者百人を出した。
- 五、一一 仏僧、身を焼いて死をもつて抗議す。
- 五、一六 仏教徒は政府に次の要求を出す。
  - ① 仏旗の許可
  - ② カトリックとの平等な待遇
  - ③ 仏徒の逮捕の停止
  - ④ 仏教宣教の自由
  - ⑤ 事件の責任者の所罰等々。……
- 六、一九 日本仏教徒の抗議集会。韓国仏教徒も声明書。
- 六、二二 大谷派宗議会、南越政府とローマ法王に打電。

等々とある。又同日報に、カンボジアの元首が、この仏徒迫害について米・英・仏・印度の大統領や首相、更にウ・タント国連事務総長に、この迫害をやめさせるための介入を要請し、このことは東南アジアの宗教的平和を乱すものであるから早急に善処を望むと電報を送つたと報じている。

私はこの事件を聞きながら、先ず政治と宗教とのからみ合いの如何とすることを考えさせられた。

日本で初めて仏教が伝来した時、進歩主義の蘇我氏は賛成し、保守主義の物部氏は反対して、恰も仏教の是非如何で乱戦を繰り返したようであるが、その実、両閥族の勢力争いに仏教が利用されたにすぎなかつたことがある。

若し南ベトナムで共産主義と資本主義の両陣営の争いが根本にあつて、表面だけが、カトリックと仏教との争いであるならば、宗教こそいい面の皮である。その真相は私共によく知れないが、すみやかに明かにして欲しいものである。

次に、本当にカトリック教徒と仏教徒との争いであるとするならば、この問題は我々一人々々のこととして深く反省しなければならぬ。

先ず報道された範囲で見ると、今迄仏教徒はゴア政権に反対の対度はとらなかつたのに、「カトリックでなければ

人でない」的な独善の思いあがりから、すでに仏教以外の  
カキダイ教、ホアハキ教を弾圧している。遂に仏教徒も思  
いあまつて反対したのであるらしい。かといつて武器は政  
権側にあるので、仏徒の反対は、ガンヂイ翁の運動に似た  
無抵抗不服従的なもので終始しているようである。唯願う  
らくは、これが政治的な具に悪利用されずに解決されよか  
しと念ずるばかりである。

「空」「無我」を中心教義とする仏教には、独善も無定  
見もそらごとたわごととして捨てられ、「唯仏是真」のひ  
かりを頂いて、そこに護られ照らされつつ白道をたどらせ  
て頂く。そこに他を責めて自己に従わそうとする独断専横  
は転化されて、相手と共に、「共に凡夫」としての自照の  
もとには寛容さがあらわれる。

従来カソリック教は、ルーテル、カルビン等の新教に強  
く対立して来たし、共産主義に対しても極力反対していた  
ことは衆知のことであるが、先日亡くなったヨハネス廿三  
世は「全人類の大家族が最後に和合と平和のうちに集るの  
を見るより大きな切望を抱いていない」と云い、又クリス  
マスのメッセージに「神は人間を互に敵としてではなくて  
兄弟として造り給うた」と報じ、新教とも理解と和合を願

政治力がなくては何も出来ない。組織の力は偉大である  
と云う。それによつて多くの人々が動くことも事実である  
が、その中の何処に救いがある。どんなに大きい力を持  
ち、世界の人々を動かし得たとしても、それだけである。  
「夏草やつわものどもが夢のあと」の空々漠々に帰する。  
科学が発達して、世界は便利になった。宇宙開発も漸次実  
現出来るであろうが、それによつて人類の真実の救いが実  
現出来るものではない。馬車が自動車になり航空機になつ

## 「教 行 信 証」

### 「信 楽 釈」 (三)

前席に於いても信楽釈をお話したのであります。この  
信楽釈のとなろは、先達来もお話する如く、至心、信楽、  
欲生とある三信中、一番肝腎の処でありまして、既に申し  
た事なれども、御存しの如く、初めに至心、信楽、欲生の  
三心とあるを、天親菩薩が一心とお示し下されたはどう  
か、と筆をお起し下されて、至心はまことの心であり、欲  
生は浄土に参らんと願ひ楽しむ心である。

い、ソ連との平和を願つた。そのために赤い法王などと悪  
口されたというが、法王は新教徒からも敬愛され、ソ連を  
含む国際バルザン財団から平和賞を贈られ、今度の訃音に  
際し、フルシチヨフ首相の丁重な弔辞をうけている。こう  
したことがカソリック教徒の本当の願ひであれば、ゴーク  
権は、宗教を私利のために悪用しているとしか思えない。  
全カソリック教徒の手によつて善処が望まれてならぬ。

嘗て教会の勢力が強く国家を凌いだ時は、宗教が政治を  
支配したが、やがて国家が勢力を増して教会が国家勢力下  
におかれ、国の元首は宗教を政治に利用して来た。然し宗  
教が政治を利用すべきでもなく、政治が宗教を利用すべき  
はでない。こうした政治と宗教のからみあいというものは  
どちらにいつても害毒を残すばかりである。

最近我国でも宗教家の政治的進出ということがしきりに  
行われ始めているが、信念をもつた政治家が、宗教的信念  
を確立して、政治界に活動することは大切なことであるが  
利用したり利用されたとするのはきびしく謹まねばなら  
ぬ。祖師親鸞は、政治力や学問で真宗を伝えられたのでは  
ない。飽くまでも庶民の中に自己を没しつ、一切善悪の凡  
夫の救済の大道を如来の本願に見出されつつ、御同朋御同  
行と呼びかけて、我等の手をとつて下さつたのである。

て便利になつたというだけである。

私共はまず眼を内にひらいて、

月花に四十九年の無駄あるき

の無駄さを知り、その謙虚な心において、真実の教を聞  
かねばならぬ。そして自分の煩惱満足のために教を利用す  
るのでなくして、真実者の導きの中に全煩惱生活を托する  
ことの緊急さをいよいよ知らされたことである。

## 講話

### 近 角 常 観

して至心のまことは信楽の信の字に入り、欲生の浄土在  
生を願ひ楽しむ心は、楽の字に入るとお知らせ下され、つ  
まり三信共に、皆この一信楽に入る肝腎の信楽でありま  
す。

申すまでも無く、信楽とは信心歡喜の有様にて、それ故  
毎々申す文なれども、親鸞聖人は「信卷」の初めに、この信  
楽を挙げさせられ

「夫れ以れば信楽を獲得することは、如来選択の願心

より発起す。」  
とあります。

如来選択の願心とは、即ち上来度々繰り返す法然聖人『選択集』にお示し下さる選択本願念仏の趣きにて、我々悪しき心の止まぬ者を、仏が引受け助くるとの廣大の思召しより、大悲の親が、この罪深き浅間しき私を、飽くまでお見捨て下さらぬ御親心が選択の願心であります。

法然聖人がお示し下さる選択本願念仏の趣きとは

「仏がこの哀れなる者がどうしても見捨てられぬ、どうかして其者を助けたい、飽くまで自分と同じ仏にしてや  
らねばならぬ」

との廣大な御親心にして、これより御成就下されたる南無阿弥陀仏の本願の念仏である。即ち親の手織りの着物と親心とは別物でない。この廣大の親心を承りて、仏の大悲は斯くまでの遺る瀬なき御親切なりしかと、心に真に頂けたのが、信樂の頂けたのである。

で、両三日来当講話も次第に進み、明かにお慈悲に気づいて下さる方が、諸方面に一時に現るのであります。これが全く今の「信樂を獲得するは如来選択の願心より発起す」で、皆様がこの廣大なる親心の程を聞いて見ればじつとして居るに居られず、聞く一念に踊躍歡喜の思いをなし下さる事であります。

で、喜びの心が起るなれば、即ち一心三信が具わるのである。即ち三信は、頂くこちらの心に頂くなれども、もと／＼仏のお心であつて、凡夫のこちらで起す心で無い。即ち至心は仏の御まことであつて、我々の方は如何にするもまことになれない奴なのである。又信樂もああ有難いと頂くが信心歡喜の信樂なれども、その信樂が我々の方より得んとして、得られる信樂でない。況んや欲生の往生を願う心などは、とても起らぬ我々なのであります。

即ち斯く私の方は仏に向いまことに出来ず、お慈悲よろこぶ信樂の心も起らず、往生を樂しむ欲生心も無き、三信などとても起らぬ私なれども、仏の方より飽くまでその私にまことになし下され、遺る瀬なき大悲をかけ、我が浄土に生れんと欲えよとの廣大の仰せを承わつて見れば、如何にまことなき私も、そのまことなき私を飽くまでお見捨て下さらぬまことに遇い、ああ有難いとの思いがおこる。又こちらは疑い隔てて居る私なれども、その者を向うより隔てず疑わず、飽くまで遺る瀬なき大悲を以て向うて下さる仏の信樂と聞く時は、その信樂がこちらの心に頂けるとなるのである。

この前の字訓釈とお示し方が變つて居る処に氣をつけねばならぬのであります。で両、三日来、皆様の氣付かるる処もここひとところである。

この皆様が親心を聞く一念に、身を歡ばし心を喜ばしめて、喜ばるるが即ち信樂の有様にて、段々文字の味を頂くと、この信樂の文字程味の深きは無いのであります。即ち信は、信心。樂は、愛樂にて、これを經文の御言葉で言えは、信心歡喜となるのである。これが私共の心中に開発して下さる、とお示し下さるのであります。

○ 処が前にも一度申した事であり、皆様も定めて御気づき下された事とは思いますが、この三信を初めの字訓釈の処では、仏のお慈悲を私の心に頂いた自分の方の心持ちでお書き下されてある。字訓釈では一字々々の字の訓が皆こちらの頂いた処でお書きなされてあるのであります。

処が、次に、阿弥陀仏が、その三信を、至心・信樂・欲生の三信と事分けてお説き下されたはどうかとなりて、即ち第三席以来お話する丁寧三信をお示し下さる処では、皆仏の御心の方よりお書きなされてあるのである。即ち前字訓釈で、三信一心の理わりをお示し下さる処では、至心も信樂も欲生も、別々に我々の心で起すのでは無い。仏のお慈悲をああ有難いと頂く一心に皆具わるのであると、私共の頂き心地の上からお説き下され、さてその信の一念に、三信の具わるは何故か。そも／＼仏の御手許に於いて、三信を成就して、それがこちらに届いて下された処

「今迄は、まことになりたい、信心を頂きたいと力んで居たのであるが、こんな自分でまことになれたり、信心が頂けたり出来るものか。こんな者をそれ程までに知り抜き、お見捨て下さらぬお慈悲」と、わが身につけ、又世を見るにつけ、この親心を聞かせて貰う一念に、「ああそうでござりますか」と、口に言葉の出る時はもう既に遅れて居る。その聞く一念に「念仏申さんと思ひ立つ心のおこるとき」と、お喜び下さるのであります。

で、信樂も、仏の方よりして、私を信じ、私を疑わず、遺る瀬なき大慈大悲を以て、私が疑い隔て、手向いしてもあ。と。が。た。た。ぬ。ま。で。に、向うより遺る瀬なく思召して下さる仏の信樂である。ここの処はよく私の言うことであります。が、どうかして親がこの着物を着せて遣りたいと、下さる親の手織りの着物を、唯着物だけと見るのでは、親の心は頂かれぬのである。その下さる親の着物は、当り前の着物の着られぬ者に、この一枚の手織りを着せてやりたい、との親のまことのかたまりなのである。

譬えばここに水が一杯ありて、これが南無阿弥陀仏の水である。その水を見ると、如何にも奇麗な透き通つた水である。というその奇麗なという処が即ち至心のまことである。そのまことの奇麗な水は、即ちなみ／＼と、其上々々

溢れて下さるお慈悲の信樂の泉である。そのお慈悲の尽きざるまことの泉を、我々の濁つた心の中へ、飽くまで仏の方より廻向して下さるの故、即ちこれが欲生となるのである。

即ち南無阿弥陀仏の一名号は、奇麗な透き通つたる仏のまことの水である。そのまことの水は、この罪深き者を、飽くまで見捨てぬとお慈悲の信樂の水である。其水を仏の御手許より私の方へ、常に、生れんと欲え〜と与るて下さる。この至心信樂欲生の廣大なる仏の仰せが届いて下さる一念に、我々の心に於いて、ああ有難きお慈悲と頂ける。

その一念に、ああ有難いと頂くまことは、即ちこれ仏のまことが届いて下されたのなれば、この心私の心に非ず。即ち仏のおまことである。又そのまことが私の胸に届いて下された処が信樂の信心歡喜であり、その廣大のまことが届いて下さるの故、このたびは私の心に自から浄土往生を願う心が起るこれが欲生心である、となるのであります。

○  
そこで本文になりては、来す初めに

「信樂と言うは、則ち是れ如来の満足大悲円融無碍の信心海なり」  
信樂と云うは、如来の満足大悲……満足大悲というは、

「夫れ眞実の教を願はば、則ち大無量寿經これなり。

(中略) 是を以て如来の本願を説くを經の宗教となす、

即ち仏の名号を以て經の体とする也」

との御文もあつて『大無量寿經』のかなめは、仏の本願一つをお説き下さる処である。故に南無阿弥陀仏の一仏名号が經の体である、とのお言葉であります。

即ち今ここでも至心を以て信樂の体とするとは、即ち、手織りの諭えて言へば、親の手織りの着物が体である。してその手織りの意味は、普通の着物では忽ち破りて仕舞い、よごして仕舞う汗かきの乱暴者に、この我が手織りを着せたい、との親のまことの塊りである。

即ち唯まこと丈けでは我々の手に握れぬけれども、既にこの通り手織りを成就して、これを汝に遣ると言つて居るのが、親のまことの事実でないか。南無阿弥陀仏は仏が助けて下さるお慈悲じや〜という証拠は、現にかく六字名号の着物の成就してあるに見よ。これが親のまことと現れではないか。蓮如上人の御歌には

かたみには六字のみ名を残しおく

なからんのちはたれも用いよ

と。それ故、南無阿弥陀仏は親のまこと、至心の体にて、この六字名号の親の手織りは、この私に着せたい〜との五劫永劫の長の間の親のまことの塊りとなるのであります。

一点の缺け目もなく、其の上〜と充ち満ちて下さるこの上無きお慈悲故、満足大悲である。又円融は「まるく融ける」、無碍は「一切の事が更に碍りにならぬ」という事である。即ち信樂はこの廣大なる如来の信心海であると、ここに海とは、仏の御手許に於いて、かく私が哀れてあると、この者を見捨てずかく廣大なる大悲の御心を以て眺めて、下さる、その廣大なるお心を海と現わし下されたのである。してこのお心が届いて下さる処が、我々の信心となるのであります。

「是の故に疑蓋ぎがい間難まがたあること無し。故に信樂たづと名く」  
故に仏のお手許に於いて、私共に対し疑いの心というものは微塵も難まじらざる廣大のお慈悲故に、私共の方に於いて如何に疑いを起し、どのような障りがあるうが、皆このお慈悲に融かされて仕舞い、更に邪魔にならぬのである。この廣大の御心故に、これを信樂と名けるとお知らせ下さるのである。

「即ち利他廻向の至心を以て信樂の体とする也」

即ち利他廻向の至心が、この信樂の体であると。こは法然聖人の『西方指南鈔』の中にも、本願の体用という事ありて、用というは、その体の働きである。これを見ても聖人は常に体と用というお話があつたと見るのであります。即ち御存知の如く『教巻』にも

而してそのまことは何かというに、唯美しく透き通つておることや、虚言いわぬことがまことではない。まこととは悪い者をどうしても見捨てられぬというお慈悲がまことである。まことは彼の男は虚言いわぬから至誠まことじや〜というのではない。如何にきたなき、泥土の如き私の心でも、それを見捨てず、飽くまでその者にお慈悲を注ぎ〜、そのお見捨てなきお慈悲のために、遂に私の頭の下るまで、お慈悲を注いで下さる。そのお慈悲が眞のまことである。故にこのたびは信樂のお慈悲の体は、即ち至心のまこととなるのであります。

□  
そこで覚如上人の『執持鈔』の中には

「されば本願や名号、名号や本願、本願や行者、行者や本願という、このいわれなり」

というお言葉があります。これは何か、本願は仏のやる願なき御親心であつて、その親心は今言う如く、南無阿弥陀仏の親の手織りの着物である。即ち本願や名号、名号や本願である。親の手織りとの心とは、離して言うことは出来ぬのである。手織りの着物無しに、唯親心だけあつても、それではこちらに頂くべきものが無いから、何もならぬのであります。親が私にこの一枚の手織りを着せようとの、その親心の頂けた時は、最早や、その親の手織りが離せぬ

という処が、親心が頂けたしるしなのである。

親心は頂けたけれども、まだ親の手織りは着られぬといふのは、まだ真に親心の頂けたのでは無いのである。自分如き他の着物の着られぬ者に、着せるとお作り下されし御親心の有難やと頂けた時は、今まで着ていた他の着物は脱ぎ捨てて、其の親の南無阿弥陀仏の手織り着て、南無阿弥陀仏々々々と、専ら念仏出来る処が、真に親心の頂けた処なのである。

「我々は今まで現世を祈つたり、諸神諸仏に心を寄せたり、もつとこの世を善くなりたいたいの思いがあつたが、そうでは無かつた。このして見よう無き、どうしてもよくならぬ乱暴者をお見捨ても無く、その者に着せると手織りを下さる瀨なき親心」

と、これを聞くなりハツと頂く一念には、現世祈りや、今までの善くなりたいたいの思いが、心で捨てんとりきんで捨てるのでは無い。この親心を頂く上は「あゝ今迄は長々馬鹿らしかつた」と、いつの間にか自然に捨てられて仕舞いて「今迄信仰を得たい。もつと人格を高めたい、極楽に生れたいなど、皆これ私のはからいであつた。かかる計らいを起し、身の程忘れて苦しんで居る私の有様を知り抜かせられ、その者に着せると、下さる南無阿弥陀仏の遣る瀨なき親心なりしか」と、その一念に今迄の着物を脱ぎ捨てて、

### 詮

全体阿弥陀仏は単独に阿弥陀仏としてお出で下さるにあらず、衆生あつての阿弥陀仏にてましますのである。然るに衆生がその根本の親心を頂かぬに於いては、仏の出現は無になつて仕舞う。それ故、即ち「本願や行者、行者や本願」である。親のそれ程の思召しが衆生の心に届き、衆生が親の下さる手織りを有難いと着る処に於いて、親は初めて所説があつたと満足して下さるのであります。

処が覚如上人の今の『執持鈔』のお言葉に「と、このいわれなり」とお示し下されてある。これは何か。これがさきいう『西方指南鈔』にあるからにて、こは高田の専修寺にある御聖教である。私は前年特に、法主台下の御許しを頂き拜見したことでありますが、その中に、先いう体用という事が丁寧に書かれてある。今これを言うところ六かしくなる故、一言に分り易く言いますと、抑々仏の本願の体は何であるか。法蔵菩薩が衆生を助けねばならぬとの遣る瀨なき願心が本願の体にて、その用は、この凡夫がその遣る瀨なき親心にて仏になる処が用である。即ちこの私を助けたいと遣る瀨なきお心が本願の体にて、それで我々が助かる処がその用の働きであると、これが一番大きい体用にて、これより段々細かく体用のことをお示し下されてあるのである。

南無阿弥陀仏々々と、念仏称えらるる処が、お慈悲の頂けた処である。即ち『歎異鈔』のお示して頂けば

「親鸞におきては唯念仏して弥陀に助けられまいらすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずるほかに別の子細なきなり。」

即ち「唯念仏して弥陀に助けられまいらすべし」の仰せが信ぜられたのなら、その信ぜられた通り南無阿弥陀仏々々と念仏が出来なければいかぬのである。その念仏の出る親の手織りの着られた処が、即ち親心の頂けたしるしである。故に本願や名号、名号や本願である。

着せたい／＼の親心はあつても、肝腎の着る着物が無ければ、親心は半分になつて仕舞うのであります。処が又その着物はあつても肝腎の子供がそれを着なければ、又親心は半分になつて仕舞うのである。

即ち次の「本願や行者、行者や本願」とあるは、仏の方に於いて斯く広大の親心より、着物を作り名号を御成就下されてあつても、肝腎の着る行者が無ければ、その御苦労が水の泡になつて仕舞うのである。

それ故、我々衆生が、この広大の親心が届き、南無阿弥陀仏の着物を有難いと頂くに於いては、頂きた自分が満足なるのみならず、遣らうとして下された仏の方が第一満足して下される。

先ず第一には、この法蔵菩薩の我々を助けたいたいの思召しを体とするならば、その本願の結集として、其親心より現われ下されし、南無阿弥陀仏の名号が用である。これは子供に着せたいとの遣る瀨なき親心より現われ下されし名号の着物なれば、即ち親心を体とする時は、名号が用となる。

又次には、その南無阿弥陀仏の名号を体とすると、この南無阿弥陀仏は、これを届けたいと御成就下された南無阿弥陀仏なれば、衆生がこれを南無阿弥陀仏と頂き称うるところが用となる。

又その南無阿弥陀仏を頂けば、それによつて往生する処が、其の用の働きて、往生すれば今度は極楽に参つて樂しむ処が又用である。

と、斯く段々に、親が子供に着せたいの親心より、南無阿弥陀仏の手織りがあらわれ、それを着れば極楽に生れるとある、その有様を、この『西方指南鈔』に、

「本願や名号、名号や本願、本願や行者、行者や本願」とお書きなされてあります。

さて斯く事分けて言うともむつかしいが、皆さんがお頂きになる処を考へて御覧になると、皆これである。自分如き罪深き者を助けようとの広大の思召しより、遂にその本願を成就して南無阿弥陀仏の六字を作り、現に待ち受け給う

遣る瀬なき御親心と、これを聞く一念に「ああ有難い」と頂き、口に南無阿体陀仏々々と念仏して、生命終れば、極樂に往生すると、要するに唯これだけの事である。これを一口に言うると、即ち「教行信証」となる。即ち「教行信証」というも、これ丈の理わりをお示し下されたに外ならぬのであります。

で親鸞聖人は『行巻』におかせられても、  
「良に知りぬ、徳号の慈父無くんば、能生の因欠けなん。  
光明の慈母無くんば、所生の縁乗きなん。能所因縁和合す可しと雖も、信心の業識に非ずんば、光明土に到ること無し。真実信の業識、斯れ乃ち内因と為す。光明名号の父母、斯れ則ち外縁と為す。内外因縁和合して、報土の真身を得証す。云々。」

同じく光明名号の因縁により、「あゝ有難い」と頂いた処が真実の信心にて、その信心の上からは、この度は南無阿体陀仏の名号と、遣る瀬なき光明に護られて、極樂報土に生れさせて頂くとお示し下されたのである。で斯く遣る瀬なき親心を我々が頂く段になると、何処から頂いても皆一つである。皆同じなのであります。

で上米申述べる如く、南無阿体陀仏の六字が体にて、その六字の体は、飽くまで私をお見捨てなき至心のまことである。そのまことは遣る瀬なきお慈悲の信樂にて、そのお

意見を記述したもので、釈尊の仏教思想から逸脱してはいない筈です。帰する処が吾々人間の解脱して無我の境界に入り、正覚を得、人として生くべき真の道を教えられたのだから、仏陀の救済によつて極樂往生するという以外に一步も出ていないと信ずる。大和の妙好人、清九郎であつたか、大藏経は悉く清九郎を助けると書いてあると、豪語して、碩学老目宿を驚ろかしたというが私もそう思う。而し

医学博士竹内大真氏著

## 聖徳太子

——日本的自覚への道標——を

此の著書を懇意な人からいただいて読んだ。非常な感激をもつて読んだのである。太子に関する著書は無数にあり、私も太子を讃仰する一人であるけれども、それらの著書を一々読んでいたのではない。併し私は此の竹内博士の著書を読んで前人未発の無類の名著であるという感じを持つている。

博士は第一に太子の時代と現代とが色々の点で似通つてゐることを列挙し、太子が異状の国歩艱難の時代に、その艱難を乗り越えて我が国内をよく治め給うたばかりで

慈悲を如来より私へ廻向して下さる処が欲生と、これが三信である。この味が頂かせて貰うて見ると、信仰上より皆わかるのである。これ皆私へ広大のお慈悲を下され、私

がそれを頂く有様をお示し下されたのであります。

で本文にありては、

「利他廻向の至心を以て信樂の体とする也」  
である。即ち仏より、この罪深き私を、飽くまで信じ疑わず、益々広大のお慈悲を以て向うて下さる。この信樂の体はと言へば、飽くまでお見捨てなき、至心のまことが体である。仏のまことというそのまことは他にあるに非ず、この遣る瀬なきお慈悲の信樂がまこととなるのであります。

△未完▽

### 歎異抄を勧める

波岡 茂輝

仏典は非常に浩瀚なものです。六千余巻という多数のもので、法然上人は、源信僧都と同様に五回読まれたそうですが、一回だけ読破してさへ余程のえらい学者です。私のような浅学非才のものには、その中の一冊読むだけの学力もなければ根気もない。然し六千巻の経文は經・律・論といくらあつても、釈尊の理想、もしくはそれから派出した

てこの信仰の真髓極致を甚だ力強く周到に、かつ手短かに教えられたのは「歎異抄」だ。信仰を把握するにはこの三十頁に足らぬ小冊子一部で充分なのであります。私はこの一冊を私の読んだ書物の中で最も有難いものと思つています。この考は決して私ばかりではありませぬ。あなたも是非これを反復熟読し、その真義を体得し、念仏の行者として生き甲斐のある生活を送つて下さい。

読みて

福島政雄

なく、対外的にも大陸の大国に対して対等以上の地歩を確実にしたまうたことを讃歎し、これを世界の舞台に押し出して、太子に匹敵する人物は他に無いと極言して居られる。

古来青史に輝く人物は決して小くない。

思想家として、哲人として一世の師表と仰がれる人物、碩学として後世学徒にその業績を讃えられる人物、縦横の経論をもつてよく治政の功を現わした政治家など。しかし太子のごとく、思想家であり、学者であり、軍事家

であり、かつ大政治家であり、大外交家であつて、しかも国の文化のあらゆる面において独創的な叡能を発揮したもうた上に、さらにより以上の意味において、日本国民の一人として、最も雄大な氣宇を體現したもうたという事、実にあらゆる面において万代の師として仰がべき大人格であらせられたのであつて、太子のごとき御方は、全く世界にその例がない。

此のような太子親で太子のことを縦横に述べられてゐる。太子の中心思想として十七條憲法第一条の「和」ということを、讓歩的や妥協的の和でなく、万物がそれぞれあるがままにその持ち前を發揮しつつ対揚する——もちつもたれつする——關係における場合に成立する和であると述べられてゐる。此の対揚の世界というのは法華經の一乘的精神の世界であり、万物相互に助けつ助けられつつ銘々の特徴を發揮して相和して行く世界であると思われぬ。

博士は医学者であるから臍臟と副腎とが全く反対のはたらきをしながら血の槽分を中和するという同一目的に掃すという例を出し、また蘭と菊とが相反するような趣のものでありながら、互にその特質を發揮して対揚の和をなすことを述べていられる。それは非常に興味深いことである。

此の著述を読みながら私は太子に対する感激が高調して

## 弥陀大悲の誓願

後藤 祐護

御和讃（正像末和讃）に

弥陀大悲の誓願を深く信ぜんひとはみな

ねてもさめてもへだてなく

南無阿弥陀仏をとなうべし

とある。

深く信じて、ねてもさめても念仏を称うる。これより外はない。極楽まゝいりはこちらで世話をすることはない。阿弥陀仏が御引き請け下さる。わが受持は、ねてもさめてもへだてなく南無阿弥陀仏を称うべしや。

わたしは懺悔が足らぬと、わが心にまことにはや迷惑して、思うようになつてくれんと、皆人の歎くところであるが、今この御和讃をよくよく頂いて見られよ。

弥陀大悲の誓願を深く信ぜんひとはみな

ねてもさめてもへだてなく

南無阿弥陀仏をとなうべし

深く信じた入とはどんな人じや。喜び上手、懺悔上手が深い姿であるか。深い姿はそんなものではない。真の深い

来て涙が出るようになった。太子は千三百年前の人でありながら過去の人と感ぜられず、今現にその御精神が我々にはたらく近代性を探たれる人であるという、如何にもそのとおりであると思われぬ。私は此の著述を現代の青年に読んでもらいたいという心がしきりに動く。小しはむつかしい処もあるが此の著述を読んで感ずる青年ならば将来の日本国を背負うて立つことが出来ると思ふ。

太子の三経義疏は日本最初の著述であり、太子の御肖像は日本最古の肖像画であり、太子御建立の法隆寺は世界最古の木造建築であることを博士は注意しておられる。そして博士は聖徳大学建設の理想を持ち、世界の人類を指導する人物をその大学において養成したいと述べられてゐる。博士の抱負は実に遠大なるものがあるのである。

博士は日本の自覚の本源としての聖徳太子を仰がれる。それは突にそのとおりである。ただ言葉使用の上で日本国のことについて革命という言葉を用い、大化の大革命などと言われていることは考を直していただきたいと思ふ。日本国は易姓革命の国ではないのである。一系の皇室を戴いている日本国には改新はあり維新はあつても革命は無いのである。（昭和三十八年四月一四稿）

此の著の発売所は東京都千代田区神田錦町一ノ十六

学芸図書株式会社定価三〇〇円

姿というは、ねてもさめてもへだてなく、南無阿弥陀仏をとなうべし、じや。

もとより妄念煩惱を離れた思になつて、美しい、清らかな心を持つてと、そんなことの出来ようはずがない。

上、天辺の月が、下、水中に映るが如く、濁れる水は濁れるまま、澄める水は澄めるまま、月の影は水に映る。水のぼらず、月も動かず、水月、相感する有様は実に妙じや。

凡夫の心を仏の心にし、仏の心を凡夫の心にするというではない。弥陀と衆生とは、離れて離れられぬ關係があつて、他力廻向の信心の月影が、妄念煩惱の濁りの中へ、あざやかな南無阿弥陀仏とあらわれるとお示しなされてある。はよういふなれば、念仏申すが喜び上手じや。念仏申すが懺悔上手じや。念仏即懺悔、即讚歎とある。称えるがあやまるのじや。称えるが讚めたてまつるのじや。喜びと満足のあらわれが称名じや。

喜び下手と歎くには及ばぬ。称え下手と歎かにやならぬ。癖というものは大切なもので、たとい信者といえど

も、始めから喜び上手、相統上手というはないものじや。

古今の妙好人伝にある、芽出度い、そんな立派な人にて、はじめは丁度、人間の生れたはなの嬰兒あかこの如くで、人間には豪傑もあるし、愚な人もある。口の上手なものも、眼力の強い人もある。聞くことの上手な人も、細工の上手な人もあるが、足の達者な人もある。さればといつて嬰兒の時から、耳がきこえ、目がよく見え、鼻が嗅ぎ、舌が味われるものではない。道具は大人なみに揃うておるが、漸々と育てられて行くのじや。子供からおいおい成人すればひととなり、身体も手足もなるのじや。

如何に信者でも無始已來の迷いが、慣れこんだ奴なれば、往生浄土の徳を聞いたでにわか細工が立派にいけるというものではない。口に称える癖をつける。心に相統の癖をつける。手も足も、報仏恩のごとく思うて、称え慣れ、敬い慣れて、念仏行者となる。唯々相統の上よりなることである。

その相統とは、ただねてもさめてもへだてなく、南無阿弥陀仏を称うべし、じや。ねてもさめてもへだてなく南無阿弥陀仏を称うべしと仰せられる。ねてもさめても称えてとある。ねてもとはグウグウと寝ること、さめてもとはパツチリとさめたこと。

さて、さめておるうちは、あざやかにわかるが、グウグウ子に別れた親の心は、思い出したら、とよその風にかかしておくような浅き人情のあろう道理がない。

弥陀大悲の誓願を深く信ぜんひとはみな  
ねてもさめてもへだてなく

南無阿弥陀仏をとなりべし

夢に見るなら弥陀を見る、寝言にいうなら南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏をはなれた、たわごと、口にせまいと思ひ、精出して念仏相統するのじや。

多くの人は、思い通し、喜び通しに眼をかけて、称え通しに心を掛けぬ。相統とは、念仏申すことじや。念仏を離れたら相統ではない。

精出して、ねても、さめても、南無阿弥陀仏を称うべしじや、先ず、やつて見なさい。申さんものでは訳がわからぬ。称えぬものには知れぬことである。精出して念仏相統さしていただく喜びが深くなるものじや。

はじめから喜び通しになりたいと思つても、煩惱妄念の胸の中、なかなかそうはなれぬ。病人に食物をうまいと思わせるようなもので、たとい病人がうまいと思つても、食べて見ると病人には味が変わつてうまいとは思われぬ。煩惱妄念の心のつきぬ、それが凡夫じやから貴い御恩と信じながら、深い大悲をおもいながら、思い下手、喜び下手、そうして懺悔の思いがすくない。すなわち、病人の味が無い

ウと寝たなれば、念仏を申すということとはとてもかなわぬことであろうとは思ふまいぞ。信者の念力はさもあるべきことである。

ひとり子を亡くした親が、とても死に別れて現実に見ることとは出来ぬが、夢現になりともひとたび遇つてみたいとの思ひは必ずある。情の切なる、思ひの極まるところ、そうなくてはならぬところじや。

いわんや、この広大なる仏恩を身にうけて、残り少ないのち、今をも知れぬ無常の身を続けさせて頂く念仏行者が、称えても称えあかれず、申しても申しあかれず、海山の大神を荷うて、うつつになりとも、夢になりとも弥陀が見たいと思ひ、寝言になりとも念仏が申したいと思ふはすじや。

孔子様は、夢に周公を見ずと悲しまれている。世間では自分を聖人で周公を能く知つておるように思っているが、自分は夢にさえ周公を見ないとは、さてさて不実なものじや、とても聖人とはいわれぬと、お歎きなされている。

起きても、寝ても、行住坐臥に相統して、誠に大悲を思うては、夢にも現にも、六字に離れぬよう、念仏相統をするという思ひにならねばならぬ。出放題に、思い出したら申そうの、思い出したら称えようなどは、御恩の知られた味いではない。

如く、念仏行者とは申しながら、心は妄念の、病だらけの心、その心の中の詮議はやめて、ただただ、南無阿弥陀仏と申さねばならぬ。どうぞ、念仏相統していただきたいことじや。

このたびは不思議な御縁で、御連枝に随行させていただき、名古屋別院にうかがい、御同行方と面会する仕合せをさせて頂きました。が、何にも知らぬ坊主、ロクなことはい得ぬが、もとより道徳さえない、ただ頼むばかりじや。私の親が、少々書物を読み、法義法縁を結んだところからとんだ看板ばかりよくなつて、年こそ一人前になつたが、学力があるはずはない。また道力のあるう道理がない。

ただ恥じ入る一方よりしかない。仕合せなことには、坊主に生れたので、親の腹の中から、南無阿弥陀仏にくるめられ、ねるもおきるも、着るも食べるも、勿体ないが不浄の紙までも南無阿弥陀仏からおさすけじや。もう極楽へ往かんでも、阿弥陀様に作られた様なもので、阿弥陀様にくるめられておる。

生理学では七年目にこの身体がいり変わるものだというが皮がむけてくるとか、きびが変るとか、千変万化、内外共に、追々と七年目七年目に入り変わるそうである。その変わるたびに新しくなつて新陳代謝とうつりかわるが、念仏

ばかりは、こわれもせず、たとい履物のはしまでもみな南無阿弥陀仏。草履をはくも南無阿弥陀仏の法からいたたく。

過去の宿業によつて、美しい着物はきられないでも、さとの眼から見れば、浄土の菩薩と変らぬではないか。

このころも東京の雑沓ざつさつの中に居つて、やかましいところにて、ただ南無阿弥陀仏の念仏は相変らず相續させてもらい、易行の法ということが、特別に知らされました。何ほ忙しい中からも、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と称えることが出来る。そこで、寝てもさめてもへだてなく、南無阿弥陀仏を称うべしじや。いよいよ懺悔いたして、念仏相續してもらいたいことじや。

かえすがえすも、念仏行者は、喜ばれぬ／＼というまいぞ。喜ばれぬという口で、南無阿弥陀仏と称えるじや。ありがたがられぬ／＼というまいぞ、その口で南無阿弥陀仏、懺悔が出来ぬというまいぞ、その口で南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏が、即懺悔、南無阿弥陀仏が即讚歎じや。ねてもさめてもへだてなく、南無阿弥陀仏となうべし。ねたらねたなり、おきたらおきたなり、本業をつとめながら南無阿弥陀仏。これは申さぬものではわかることではな

## 『朝晩仏様を拝みましよう』

北米・サンジヨセ

北条 恵 実

本年五月の親鸞聖人の降誕会を期して、全米の各仏教会、各家庭で「朝晩仏様を拝みましよう」運動を力強く展開することとなつた。

この標語を選ぶについては、種々論議研究されるところがあつた。

「今更こんなわかりきつたことを」

「では今まで仏様を拜んでいなかつたというのか。外聞も悪いではないか」

「ご当流は信心正因だ。拜むという形式にとらわれすぎはせぬか？」等々である。

こうした諸問題をはらんでいる事を十分知りながら、なおこの標語と運動を、まず選んだという意義を味うこと、それ自身の中に、すでに宗教的反省と実践があると考へるのである。

我々は幸にして人間の生を享けた。よつてこの人生を醉生夢死の間にすごしてはならない。真実の人生の意義を味得すべきである。

人生の真実の意義の答え——その出発点は、自分自身の

い……。

あすありと思うころのまよいより

今日もむなしく暮らしぬるかな

今日ばかり思うころを忘るなよ

さなくばいとどのぞみ多きに

往生の世話は無阿弥陀仏が引受けて下さる。こちらは南無阿弥陀仏の一方。往生の世話は離れさせて頂くが口が離れられぬ、口が離れられぬうちはやんちやも出来ぬ。念仏を精出して申さつしやい。精出してよろこぶかわりに南無阿弥陀仏、あやまるかわりに南無阿弥陀仏。夢も寝言も南無阿弥陀仏。どうぞこの心得でありたいことじや。

(あとがき)

後藤師は御自坊にあつては常に

極悪深重の衆生は 他の方便さらになし

ひとえに御を称してぞ

浄土にうまるとのべたもう

の御和讃を引用されて、涙と共に懺悔念仏していられたと伝えられる。(播州に生れられた常念仏の人)

本稿は明治卅三年一月名古屋東別院での講話の筆記。

本当の姿を知ることである。

それでは自分の正体を自分で知れるかというに、それは不可能である。自分の顔が、その顔についている自分の眼で見えないと同様である。

ただひとつ「松陰の暗きは月の光かな」とおり、如来様の智慧光にあつてこそ、始めてはつきりと自分の心の本当の姿を知ることが出来るのである。いいかえると、この時始めて、本当に恐しい地獄相をわが心中に見出すので、このところを親鸞聖人は「地獄は一定すみかぞかし」と告白されたのである。

されば浄土とは清らかな天上に求めるべきでなく、真反対に、罪と闇に閉ざされた地獄の底をつきぬけるところに感じられる国土といつてよい。この境地を味得すれば、お浄土のあるとか無いとかいうことは問題でなく、わが罪業の深さ重さを知らされるにつけ、如来様のお慈悲の手強さを愈々知らされるばかりである。

「弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身に

てありけるをたすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさまよ」

との聖人の常の仰せは信仰の極致である。かくて如来様のお智慧に我が罪業を照らされ、更にその罪業を救いとかし転じて下さる如来様の極まりないお慈悲を頂く時、その宗教的体験は、生活の上に必ず一つの形をとるであらう。

支那の善導大師（約千三百年前）は、念仏行者の生活行として、読誦・觀察・礼拝・名稱・讚嘆供養の五つをあげられた。これを五正行といい、その中第四番目の稱名を一番大切な行とし、始めの三つと後の一つを助業だとしておられる。

勿論ここにある稱名というのは、信心から流れ出る稱名である事は当然であり、又四つの助業は第三の礼拝に納められると私は思う。即ち稱名と礼拝が我々の信仰生活の端的な形となつて現われるもので、それが一番手近かに行われる場合は、わが家のお仏壇であると思う。

「日本書紀によると、日本の家庭にお仏壇が始めて安置されたのは天武天皇の白鳳十四年で、今から約千三百年昔になる。それからこのお仏壇の普及については長い歴史や伝統があつて今日に及んでいる。とにかく私達の先祖は、

長い千三百年間、わが家のお仏壇を相つぎ、相伝えて拝みつづけて来たのである。

かくて自分では自覚しなくとも、われわれには、朝に夕に仏様を拝み仕える魂のしつけをうけて来て、それが生活の血肉となつておるべきである。

清らかな朝早く、又楽しい夕餉の前、お仏壇の前に一家揃つて礼拝する、そこに聖人を初め祖先の人々の懐しい姿が浮かび何とも云えぬよろこびが湧き出る。このお仏壇を中心とした家庭団樂の中に本當の日本の文化の華が開くであらう。

かくて「朝晩に仏様を拝みましょう」の実践は、我々の宗教生活の出発点となり、又そのままゴールだといつてもよいのである。

昭和卅八五月、「聞光」

## 堂の鈴 (十一)

佐藤 強 三 郎

(註) 編者の不注意から第五号堂の鈴(十二)を前にのせました。お詫び申し上げます。

女中かみ

命 (三三)

編集者

翌朝、水上駅から二人は汽車に乗り、湯沢を過ぎ、長岡駅を経て、信哉だけは途中柏崎で降りたが、一郎はそのまま直江津へ直行した。

お小夜は直江津の家に居た。

一郎「キツパリ、別れましょう」

小夜「わたしはいやで御座います」

一郎「僕は今後決して来ません」

小夜「お出でがなければ、私の方からお店へ行きます」

一郎「来て会いません」

小夜「店で動きますせん」

一郎「営業妨害で警察へ訴えます」

小夜「何ですつて、私が警察へ呼ばれば、貴方もよ。私はそのうなれば、新聞記者にみんな話しますよ。いいの」

一郎「それは貴女の自由です」

小夜「ホント」……………

小夜「そんなことになれば、私も貴方も、人目が悪いでしょう。どうかこれまでの様に交際をうけて下さい。

私も今後は絶対に、お店の邪魔は致しませんから。

奥さんの外に、別の女と遊ぶ位は、いまだき誰もがやっていますことよ。自由平等の世の中です。恋愛も自由なんです。相思の闇柄で泊る位はいくらもあるのよ。

貴方は堅すぎるの、弱虫のくせに。考え過ぎてているの。

私はこの期になつて、今更貴方を忘れて、離れるなんて、死んでも出来ませんわ。いいでしょう。ホンの時々来て下さればそれで満足なのよ。奥さんに知れない様に上手に二人で楽しみましょう。そんな方法はいくらもありますよ。そうして居れば、家庭に風波は立ちませんし世間にも知れませんか」

一郎「交際は続けません」

小夜「あんた。ほんとに止めるの、それホント？」

一郎「ほんとです」

小夜「勝手におしよ。ふん、下から出ればつけあがり、何でも止めるというの。誰が止める権利があるの。この交際は、もともと貴方の方からしかけて来たのでしよう。頭を下げて、手を合わせて、……哀願して、金を出してサ。それを今はみんな忘れて、良い気になつてゐるのね。男つて本当に自分勝手ね。卑怯ね、ずうずうしいのね。無責任なものね。自分の都合ばかり言つて、私は断然止めませんよ、よく覚えていらつしやい。

人の噂は、直江津、柏崎はもとより、越後中一ぱいだわ。今更やめるなんて出来るもんですか。どうせ評判ですもの。私は一郎さんに捨てられて生きてなんか居ませんよ。そんな女ではありません。本当に貴方が私を捨ててゐる覚悟なら、私は死にますよ。ホントよ。貴方一人を残してなんか行ける女と思つて。貴方と奥さんとの仲の良い処を見せつけられて、そんな楽しみを見せつけられて、その相手をこの世の極楽に残して、私一人で死ぬますか。死んでも死に切れません、幽霊になつて出て来ますよ。よく覚えていらつしやい。

どうです、それよりは、どうせ悪人同志です。せめて一緒に心中して下さい。どうですか  
一郎「私は罪を犯しました。然し私は死にません」

直して下さい。私は殺せません」

小夜「臆病ね、それでも男」

一郎「本当に死にたいのですか」

小夜「そりよ。……ほんとよ」と一郎をにらんだ。二人

とも、眼と眼を合わせている……

一郎は膝に手を組んで静かに考えた。

「自分は人目を恥じ、何時かは二人で心中に追い込まれて行く外はないだろう。その時のためにと。毒薬を用意して湯沢温泉まで考えに行つたのであつた。……然るに、こんな臆病な、意気地なしの、悪い者をあわれんでどこどこまでも呆れない。いかなる悪をも救わずんばおかぬという不思議の真実を聞いたのだ。無碍の本願を聞いたのだ。

そこで急に心気一転、いかなる恥をも忍んで生き抜こう死ぬことを止め、妻お藤の誠にこたえ、世の非難に堪えて行こうと翻意したのであつた」と自問自答、しずかに瞑目した。やがて、おもむろに、お小夜の方を向き、一郎「それ程、死にたければ、勝手に死んで下さい。これを呑めば死ぬます」

と、懐中から紙包を、お小夜の前に出し、剃刀を手早くとつて、キツとなつてお小夜を見た。一郎のどこにも寸分の

小夜「何ですつて。罪を犯したものが、償わぬという法はないでしょう。この世でも、あの世でも、そうでしょう。貴方は卑怯ね。それでも男ですか、人間ですか。あーああきれたものだ。同罪のものが、自分だけ逃げて、生き残りたいなんて、犬畜生よ」と声もだんだん上つてきた。

小夜「ゆるして下さい、すみません。どうか交際を続けて下さいませんか。お願だから、どう、ね、ね」  
茶釜の湯がたぎるばかり。風もない。

小夜「返事して頂戴、お願します。どうなの。ああ、哀しい、ままならぬ浮世とはこんなもの……」  
一郎「私は心にきめたことは言つたつもりです。私の心は変わりません」

小夜「ホントに別れる気なの」

一郎「別れます」

小夜「エ、ホント」と顔色を変えて震え出した。奥へ入つて、わなわなと震える手に、剃刀を持つて来た。それを一郎の前へつき出し、一郎の膝のそばに置いて

小夜「殺して」と顔を上げた。

一郎はキチンと座り、キツとなつた……

一郎「そんな短気はやめて下さい。気を落付けて、考え

際もない。見る見るお小夜は青くなつてふるえあがつた。

一郎「私は貞淑な妻に罪を犯しました。

私は貴女にも、罪を犯しました。

私は妻の許へ帰るのが本当だと気付きました。

私は貴女と、キツパリ別れねばなりません。

私は死にません。

今後貴女が、如何様のことをなさろうと、それは貴女の御自由です」

長い間、沈黙が続く。一郎の眼は動かない。どつしりとすわり、手を両膝の上にチャンと置いて動かない。眼はお小夜を離れない。そして遂に、

一郎「これで失礼します」と挨拶した。一郎は剣道の選手であつた。真面目に身構え、八方に気をくばり、剃刀を紙に包んで下に置いた。「左様なら」と丁寧に、ゆつくりと挨拶して静かに玄関を出た。

一郎が出た途端に、急須が飛び、茶碗が飛んで、玄関のガラス障子はガラガラと何枚もこわれ落ちた。……ワア——と、部屋の中から泣き声が湧いて来た。

一郎は歩きながら思う八いつまでも情慾のやまぬ極悪の者を、どこどこまでも呆れ給わぬ御慈悲を信じ、青年の我

は、幾度失敗しても立直り、くじけず、あきらめず、どこまでも真実にひかれて、正しく進んで行こう。今や何ものをも恐れず、妻お藤の懐へ、死を決して帰ろう。今まで、自分は責任をさけ、右にも左にも善く思われない。そして世間に知れぬ様に、秘かに、うまく片付けたいと、二股も三股もかけて、よるめて来た臆病者であつた。こんな臆病者も、眼に見えぬ力のために押し出されてしまつた。もう前に鬼が出ようが、蛇が居ようが、逃げることは出来ない。進め進め、うしろには磐石の盾が控えている。どうせ退却しても、鬼に喰われるか、押しつぶされるかするくらいならば、進んで戦つて、どこまでも正々堂々で行こう。

柏崎への帰路、汽車の中で熱心に歎異抄を播いた。又聖典を開いて、あちらこちらと読みあさつた。

親鸞聖人の御作、教行信証の中でも、正信偈はその心臓部とか。その偈文の真始めから

婦命無量寿如来 南無不可思議光

と書き出してある。これは如来に婦命し、南無することである。

又、行巻に……南無の言は婦命なり、……ここをもつて婦命は本願招喚の勅命なり、……と。明かに解釈してある。

聞くところによれば、古来、婦命の解釈には大変むつかしい問題があるという。

如来に婦命するのになせそんなにむつかしいことかあるのであろうか。それは宗派により、信者の根拠により、おのずから変つてくる。又解釈には、大体三つあるとか。

第一婦命を、命を捨てると解釈するもの、

これは、真面目にやらなければいかぬ、と、血を吐く思いでやり抜いて、命さえも捨てるが、安心がな

い。

第二 婦命を、仏の命に帰ると解釈するもの。

これは、仏の命に帰ればよいのだから、これも恵みあれも恵みと自ら煩惱をゆるして、やはり安心にならぬ。

第三 婦命を、本願招喚の勅命に帰する、と解釈するもの。これは親鸞聖人の解釈である。罪惡深重の衆生をたすけんがための本願不思議をきいて、その招喚に信順して、念仏往生する。

等々である。これらを思出しては聖典のあちこちに眼を走らせた。

さればよきことも、あしきことも業報にさしまかせて、

ひとえに本願をたのみまいらせばこそ他力にてはそうらえ

(歎異抄十三章)

母をおもう

高村 光太郎

一生悪を造れども 弘誓に値いたてまつれば  
安養界にいたりて 妙果を証せしむといえり

(正信念仏偈)

聖道権化の方便に 衆生ひさしくとどまりて

諸有に流転の身とぞなる 悲願の一乗婦命せよ。

(浄土和讃)

そして遂に、一郎は、

「本願を信じ念仏もうさば仏になる。そのほかにの学問かは往生の要なるべき。」(歎異抄十二章)

……の御文を拝読して、南無阿弥陀仏。婦命無量寿如来と念仏申すようになった。

昭和三七・八・一

夜中に目さましてかじりついた  
むつとするふところの中のお乳。

「おとうさんとおかあさんとどうちが好き」

と夕暮の背中の上でよくきかれたあの路次口。

のみで怪我をしたおれのうしろから

切火をうつて学校へ出してくれたあの朝。

酔いしれて帰つて来たアトリエに

金釘流の手紙が待つていた巴里の一夜。

立身出世しないおれをいつまでも信じきり

自分の一生の望もすてたあの凹んだ目。

やつとおれのうちの上り段をあがり

おれの太い腕に抱かれたがつたあの小さなからだ。

そうして今死のうという時の

あの思いがけない権威ある変貌。

母を思い出すとおれは愚にかえり

人生の底がぬけて

怖いものがなくなる。

どんなことがあるうともみんな

死んだ母が知つてるような気がする。



### あとがき

梅雨もすぎて、きびしい暑さとなりました。長雨で麦の作が悪く、稲の株がはらな由、豊年続きも本年ばかりは難儀な年となりました。それにつけても天地の恵みというのを忘れては自分が強く反省させられることでもあります。

一人老いて青年のすぎやすぎを知り、人病んで健康の尊さを知る」と申しますが、私共は失うことによつて、得られたこと以上に深い教えをうけることがあります。

南ベトナムの仏教徒迫害事件は皆様もどんなにか心を痛めていられますことか。事態の真相を早く知り、この解決の報せの速かならむことを祈念して居ります。

そして対岸の火とせず、足下を照願し、我等仏教徒のよき葉とさして頂きたいものであります。

故後藤祐護師は、重に機の上から法を喜び、博多の七里恒順師は、主として法の上か

ら信味されていた由、近角先生も述べていられますが、明治三十三年に、名古屋の東別院での同師の御法話を篤信の方が筆記されて、永く有縁の人々に頒けて嘗味して居られたものであります。故服部きんさんにこれを頂きそのままに蔵することの勿体なさに、今回発表させて頂きました。師の面目躍如たるものがありますと共に、懈怠に流れる私共に、覚醒の誠めを有難く頂きました。

北米の北条師の、全米仏教徒への喚びかけは、私共の戦後の生活者へも要望されることであります。一つには北米における仏教徒の動きの一端を知り、同時に我々の歩みの上に参考とさせて頂きましょう。団扇は手に持つてあおいでこそよい風をうけるものであります。仏壇がありながら仏拝を忘れ、念仏を与えられながら唱名を忘れては、廻施して下さる方の思召にそむき、遠い祖先の遺産を無にすることであります。

最近茅東大学長が「小さな親切」ということを提唱して身辺手近かなところにある小さな親切の大切さを教えられますが、信の旅においても、身近かに蒙る御恩をまぜず思い浮べまじょう。

### 御案内

第一日曜、歎異抄感話。

第二、第三日曜、午后一時半、二道会例会。

二四日午前・午后、市内昭和区小椋町教

西寺、法話会

ばせを翁

晴つぽやはかなき夢を夏の月

定 価 一 部 二 十 五 円 ( 送 共 )

半 年 百 五 十 円 ( 送 共 )

一 年 三 百 円 ( 送 共 )

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番